

(別紙様式2)

普及指導員調査研究報告書

所属名：山口農林事務所農業部

担当者名：中村誠司

課題名	いちご次世代品種「かおり野」の特性把握
1	調査研究チームの構成 山口農林事務所農業部 中村誠司、古江寿和（2名）
2	課題の目的 イチゴ「かおり野」の現地適応性の確認を行い、品種特性の把握を行うとともに、栽培技術の確立及び普及の資とする。
3	調査研究期間 平成24年9月から平成25年3月
4	調査研究の対象地域・場所 山口市平川及び二島 イチゴ栽培ほ場（2カ所）
5	調査研究方法の概要 (1) 生育調査 ①開花及び収穫始め…中庸な栽培株で50株調査し、1割程度が開始した時期 ②草勢(草高、葉長)…中庸な栽培株で連続10株×2反復調査 (2) 収量及び果実品質(糖度)調査 ①収量：JA共販出荷量とした。 ②糖度：収穫可能な果実(L規格程度)5果をつぶした搾汁液のBrix値とした。
6	結果の概要、成果(または中間報告) (1) 生育調査 ①開花及び収穫始め 頂花房については、平川地区では11月中旬から、二島地区では11月下旬から開花を始めた。なお、慣行品種の頂花房開花始期と比較すると、平川地区(慣行品種：「さがほのか」)では並み、二島地区(慣行品種：「さちのか」)では早かった(データ省略)。また、以後の花房については連続出蕾し、両地区とも概ね1カ月毎に開花した。 ②草勢(草高、葉長) 両地区とも、調査期間を通じて安定した草勢を維持した。特に、二島地区では、調査期間を通じて旺盛となり、冬期の電照処理を要しなかった。 (2) 収量及び果実品質調査 ①収量 両地区とも、調査期間を通じて慣行品種よりも多収であった。特に、高単価の見込める年内の収量は、慣行品種よりも著しく多かった。 ②果実品質(糖度) 両地区とも、調査期間を通じて慣行品種よりも高い糖度を維持したが、二島地区では、厳冬期(1月及び2月)の糖度に果実間のばらつきが認められる等、果実の内容品質が低下する傾向にあった。

表1 開花及収穫はじめ

	開花はじめ (収穫はじめ)		
	頂花房	第1次腋花房	第2次腋花房
平川地区	10月18日 (11月中旬)	11月11日 (1月上旬)	12月29日 (2月中旬)
二島地区	10月26日 (11月下旬)	11月12日 (1月中旬)	1月6日 (2月中旬)

表2 草勢の推移 (cm)

		10月	11月	12月	1月	2月	3月
平川地区	草高	14.6	27.2	28.5	24.3	21.0	26.0
	葉長	17.8	29.1	26.2	21.9	20.7	27.0
二島地区	草高	28.4	41.6	44.8	46.2	42.6	31.9
	葉長	31.8	40.6	41.2	37.6	31.4	29.6

表3 収量の推移 (kg/10a)

地区名	品種名	11月	12月	1月	2月
平川地区	かおり野	265	782	639	149
	さがほのか (慣行品種)	96	536	477	136
二島地区	かおり野	11	377	1,266	142
	さちのか (慣行品種)	0	41	684	165

※2月4日出荷分まで集計

表4 糖度の推移 (Brix)

地区名	品種名	12月	1月	2月	3月
平川地区	かおり野	9.9	11.8	11.0	10.4
	さがほのか (慣行品種)	-	10.6	9.8	9.2
二島地区	かおり野	9.3	10.0	9.0	10.4
	さちのか (慣行品種)	-	9.4	9.5	10.2

7 今後の問題点

収量については、慣行品種よりも多収が見込めるものの、定植後、生育が旺盛となると、果実の外観及び内容品質が低下する傾向にある。

8 普及活動上の留意点

管内における「かおり野」の普及促進にあたっては、収量及び果実品質を確保し得る草勢管理手法等について、再度検証し、確立する必要がある。

※ 報告書は図表、写真等を含めてA4判で2ページ以内にまとめること